



第5回 日本の自明性とヨーロッパの自明性の恐るべき落差

早くもライブツィヒでの滞在も半年を越えた。ちょうど折り返し点である。ついでに私事で恐縮だが9月8日に60歳の誕生日を迎えた。昔風にいえば還暦である。60年に1回まわってくる「劫の虎」の年でもあるからまさに「還暦（暦がもとに還る）」だ。いささかの感慨がないといえようそになるが、一向に年をとったという実感は湧いてこない。それどころかますます若い頃考えていたことに回帰してゆく気がする。言い換えれば、若い頃考えていて未解決なまま残されている問題がまだまだたくさんあるということだ。未熟さの証明のような気もするが実感なのだからやむをえない。この通信もそうした残された問題を考える場だと思う。幸いドイツという日本から離れた場にいるため、少し冷静に考えることが出来る。

前回日本の社会が抱える病理について考えてみた。それから二ヶ月あまりたったが

ドイツから日本の状況を新聞等を通じて眺めていると問題は依然として深刻なようだ。昨年の政権交代によって民主党政権が成立したが、早くも鳩山首相の辞任、菅代表の首相就任とそれに続く菅 VS 小沢の熾烈な権力闘争と、政権の枠組みが大きく揺らいでいる。予算・財政問題、普天間基地移転問題、尖閣諸島（釣魚台諸島）をめぐる中国との軋轢等々、内外の難問が民主党内閣を次々に襲っている。これらの問題はもちろん時局問題である。だがそこからもより根本的な日本社会の問題が透けて見えるのだ。

前回日本社会が上からの規制・規則の呪縛が極めて強い社会であると述べた。このことは、別な言い方をすると日本社会が暗黙の前提、自明化された前提を数多く抱え込んだ社会であることを意味する。この言語化されない前提が人々の生活や発想を縛り、個人の自立＝自律の条件となる自前の思考力や判断力を奪い取ってゆくのである。

こんな例はどうだろうか。ヨーロッパの鉄道駅には改札口がない。駅の入り口からホームまでそのまま行くことが出来る。私の知る限りでは改札口のあるのはパリの地下鉄ぐらいだ。日本人は駅に改札口があることを自明化している。日本にいる限りは駅に改札口があるのは永遠の真理のようなものだ。だがヨーロッパに来るとそんな日本的自明性はあっさり否定される。ヨーロッパでは改札口のないのが自明性なのだ。

こんなことをいうと、さぞヨーロッパでは無賃乗車が多いだろうと思う向きもある

かもしれない。たしかに無賃乗車は存在する。だがその割合はおそらく日本人が考えるよりはるかに少ない。それは、ときどきある車内での抜き打ち改札に遭遇するとき分かる。その際に切符を持っていないと50ユーロの罰金を無条件で課される。私も何回か遭遇したが、罰金を取られているケースを目撃したのはキールという町でバスに乗っていたときだけだった。もちろん問題の本質はそんなところにあるわけではない。改札口の有る無しという事実から見える社会の違いこそが問題なのだ。

改札口の存在は基本的に「ひとは無賃乗車をするものだ」という性悪説を前提にしている。歴史的に遡れば荀子に代表されるアジア的専制国家の統治技術としての法家思想がその起源といってよい。そこには様々なファクターが関わっているが、最も重要なのは国家による統治のあり方に人民を参加させないという前提である。日本式に言えば「よらしむべし、知らせるべからず」である。というのも人民とは国家＝「お上」から見て愚鈍で、性悪で、ほっておけば際限なく悪さをする存在だからだ。人民とは国家＝「お上」の命令や規則に唯々諾々と従っている限りにおいて「良民」であり、恩恵を施すべき存在なのである。もうひとつ例を挙げよう。日本で外貨を両替するときの面倒臭さは海外経験者ならよく知っているだろう。だがヨーロッパの大都市では町にいたるところに両替屋があり、てんでに自分でレートを決めて自由

に両替業務を行っている。この落差から見てくるのも日本的自明性の特異さ、歪みである。ようするに日本の国民が勝手に日本の外部と交渉すること自体がすでに悪なのだ。だからやむを得ず接触を認める場合でもそれは「悪」として国家による厳重な管理の下に置かれなければならないのだ。これが日本的自明性なのだが、そんな自明性は日本の外に出ればたちまち吹き飛んでしまう。軍事要塞のような成田空港が当たり前のように受容されている日本的自明性こそ「国辱」そのものなのだが、そう思う日本人はほとんどいない。もっともこんな風書いている私だって、オランダのアムステルダムやハーグで若者たちが当たり前のように「歩きマリファナ」をしているのを目撃したときはさすがにぎよつとなった（ヨーロッパではマリファナはよほどのことがない限り逮捕されない）。あんなにいい加減なルールで社会が成り立つのかと正直思ったものだが、周知のようにオランダはEUの中で経済も順調だし生産性も非常に高い。今選挙の結果をめぐって政府がなかなか成立せず一種の政治空白状態にあるが、社会そのものは小揺るぎもしない。オランダの自明性こそ日本的自明性の対極にあるものだという気がする。こうすると社会の「安全」はどう保たれるのだとむきになる御仁もいるかもしれないが、そういう「安全」が社会の根源的な危険の裏返しでしかないことは前回述べた。

さてこうした日本的自明性とヨーロッパの自明性の恐るべき落差から見てくるも

のとは何だろうか。それは結局自分たちの上位に国家＝「お上」が存在することを前提にし、私たちが自分自身で思考し判断し決めなければならないこと（それは「社会のあるべきかたち」である）を全部国家＝「お上」に委ねてしまっている社会の自明性と、いろいろ問題を抱えながらも——ヨーロッパがかつて野蛮な帝国主義国家の集まりだったことはいまでもない——、市民社会の自律という伝統のなかで国家抜きに自分自身の立場や存在に対して決定を下し、それに基づいて行動することを自明化してきた社会の落差といえるだろう。普天間に象徴される沖縄の基地問題、その背景にある日米安保の問題にしても、尖閣諸島（釣魚台諸島）問題にしても、日本的自明性にかかれば、まず国家＝「お上」の存在が自明の前提とされ、自分自身の存在の根拠がそこに重ねあわされ（日本人＝日本国民＝日本国家良民）、その「安全」が自明化され、それを脅かすものはけしからんという倒錯した判断にいたる。つまり国家＝「お上」と自分の存在の無限循環から一步も外へ出られないのである。ヒステリックで浮薄なナショナリズムの熱狂に浮かされる前に、一度じっくりと国家＝「お上」の利害と自分という一個人の利害が本当に一致するのかどうかを考えてみればよいのだ。かつて20世紀ドイツ文学を代表する文豪トーマス・マンは亡命先からドイツ国民に向けて、ナチズムを生み出した祖国ドイツの病理を抉り出す講演を繰り返し行い、今ドイツに反対することこそがドイツを愛す

る行為であると訴えた。また戦後ドイツ最大の詩人のひとりであるハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーは『何よりも駄目なドイツ』という著作を通して、「なによりも駄目な」という自覚を通じてしかドイツがナチスの崩壊以降自立した国家へと向かう道はないことを逆説的なかたちで力説した。こういう言論の力がナチズムの過去と対峙し、かつての敵国フランスと和解し、EUの一員として承認された現在のドイツを作ったのである。残念ながら日本にはこうした議論はほとんど見られない。そうした議論はすぐ「自虐的」「売国的」

「反日的」というレッテルを貼られ議論として圧殺されるからだ。そもそも自由な議論が成り立たないところに個人の自立＝自律がどう成立するというのか。そうした議論の圧殺がますます日本社会から自前の思考力や判断力を奪い社会を空洞化させるということがどうして分からないのか。よっぽどそのほうが日本社会にとって「反日的」であるような気がする。そうだ、ひとつ思い出した。寺山修司の短歌に次のような作品がある。「**マッチ擦るつかの間の海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや**」

（太字筆者）。まずこの歌を拳拳服膺するところから始めたらどうだろうか。繰り返しになるが、今日本社会は戦後が築いてきたポテンシャルをほぼ使い尽くし、それに代わるヴィジョンも見えず、たいへん危ういところに来ている。若者たちのエネルギーは枯渇し、社会を推進する動力源がどこにも見えないからだ。今真剣にひとりひと

りの自立＝自律とそれを基盤にする共生を
考えないと日本はとんでもないところへと
向かいそうな気がする。国家＝「お上」に
すべてを委ねて安穩としている暇などない
はずだ。

高橋順一